

13	豊橋
----	----

◎高師小 柳澤 拓也 汐田小 松原 亜希子 大村小 寺田 光裕

分科会番号	3
-------	---

分科会名	社会科教育（小）
------	----------

研究題目 異文化を尊重し、国と国のつながり方を考える社会科の授業
～ぼくらは国と国をつなぐ架け橋（6年）の実践を通して～

1 テーマ設定の理由

豊橋市社会科研究部では、これまで子どもたちの主権者意識を育てるために、研究を重ねてきた。一昨年では、中小企業に焦点をあて、会社の生き残りをかけた企業独自の工夫や努力を学習することを通して、多面的に物事を見る力を育てることができた。昨年は、裁判員制度を教材化し、自分たちも社会の一員であることを自覚し、社会に積極的に参画していく態度を育てることができた。これらの研究の成果をふまえ、今年度は、これからの国際社会のあり方に目を向けた実践を行うことにした。

日本における外国人の数は年々増加している。国際化が進む現代日本において、国と国とのつながりを学習していくことは、必要不可欠なことである。しかし、現在の社会科では、外国と日本の文化や習慣の違いを理解し、違いを認めることに焦点をあてて学習が行われている。国と国がどのように関わりをもっているのか、国と国がつながることによってどのようなメリットやデメリットが生まれるのか、そういったところには目が向けられていない。

そこで、本研究では、豊橋に來ている留学生を教材化し、研究を進めていく。留学生との交流を通して、外国の文化や習慣を学び、留学生の思いに迫っていく中で、子どもたちは、外国人に対して親しみをもち、留学生を受け入れることに好意的に考えるようになるであろう。そして、さらに日本にとって、留学生を受け入れることにどのような意味があるのか、学習を深めていく。それらを知ることによって、留学生を受け入れることのメリットとデメリットに気づくであろう。これらのことをもとにして、留学生30万人計画について考える場を設定する。個人としての関わりと国としての関わりなど多くの視点をもって判断できるようにしたい。単元を通して、これからの国際社会を担う子どもたちが、様々な視点から、外国との関わりを深めることのよさを感じられるようになってほしい。以上の理由から、本研究のテーマを「異文化を尊重し、国と国のつながり方を考える社会科の授業」とし、研究を進めていくことにした。

2 研究の構想

（1）研究の仮説

- ・国際理解の学習において、地域の留学生を教材化し人との関わりを大切にしながら外国文化を学ぶ学習を展開していけば、子どもたちは、他国の文化のよさを理解するとともに外国人の思いに寄り添い、その人の立場に立って物事を考えられるようになるだろう。
- ・留学生について学習をすすめる中で、留学生に対する日本の政策のメリットやデメリットを考える場を設定し、子どもの主体的な学びを支えていけば、子どもたちは国同士がつながることのよさに気づき、互いの国にとってよりよい関わり方を考えるようになるだろう。

（2）研究の手立て

①人との関わりを大切にしながら外国文化を学ぶ

- ア ゲストティーチャーとして留学生を招き、複数回関わるの場を設定する
- イ 日常的にコミュニケーションをとれるようメールを活用する（ネットタッチコミュニケーション）
- ウ 外国文化を体験する活動を取り入れる

②国同士がつながることのよさに目を向け、世界と日本、外国人と自分たちのかかわり方を考えるための工夫

- ア 身近な外国人の思いに迫る学習と、日本の政策について考える学習を段階的に取り入れる

③主体的な学びを支える

- ア 個々の追究内容に応じた読み取り資料を作成し、問題解決の支援を行う。
- イ 課題解決のための話し合いに積極的に参加させるために、朱書きと対話により、個々の考えに根拠と自信を持たせる。

3 単元構想図（24時間完了）



※留意点 ◇支援 ☆評価

※修学旅行中に、外国人と接する機会を持たせることで、日本に來ている外国人について考えていくきっかけとする。

※日本に遠い国からたくさんの外国人が来ていることに気づくことができるように、地球儀や資料集で面積を比べたり、外国人の居住数のグラフづくりをしたりする。

※一定の地区に外国人が集まっていることに気づくことができるように、豊橋市の白地図に居住数を書き込んでいく作業を行う。

（国際日記）

※直接外国人に会って聞いてみたいという意欲を引き出すために、自作資料を活用して調べ学習を行う。

◇外国人が日本に來ている理由がわかる

※豊橋技術科学大学

グエンさん（ベトナム）

テイさん（中国）

※母国の文化や生活についてや、留学生として勉強している内容、普段どんな毎日を送っているかを話してもらい、留学生の国についての興味をもたせる。

◇留学生の文化紹介から、外国や留学について興味を持ち、調べようすることができる。

※技科大の学生とメールのやりとりをして、関わりを深める。（ネットタッチコミュニケーション）

☆情報量が多すぎて、一度に理解できない子には、資料を簡単にしたものを手渡す。

◇留学生30万人計画の概要をまとめることができる（ノートまとめ、国際日記）

◇留学生30万人計画を行うことで、日本や世界にさまざまな影響がでることを理解することができる（話し合い、国際日記）

4 研究の実際

(1) 地域の外国人に興味をもつ

本校は、全校合わせても外国籍の子どもは6人と少ない。本学級にもブラジル国籍の子がいるが、2歳から日本に住んでいるため、他の子どもたちにとっても、「外国人」という感覚はほとんどない。このような実態から、外国人に興味をもたせるために、英会話授業の一環として、「外国人にインタビューをする」体験をした、修学旅行の経験を話し合うことを導入とした。感想交流から、子どもたちは、「豊橋市には、どれくらいの外国人が住んでいるのかな」「京都には、100カ国ぐらいの国から観光のために来るらしいけど、豊橋市には何カ国ぐらいの国から来ているのかな」という疑問をもった。

市役所の資料や自作資料をもとに調べ学習を行い、京都には及ばないものの、70カ国から来ていることや、全国でも10位以内に入る数の外国人が住んでいることを知ると、その事実によどの子も驚いた。発表後の意見交流では、「京都のように、観光で来ているわけではないらしいけど、約2万人も豊橋に住んでいるにはどうしてかな。」という疑問が出てきた。予想では、ほとんどの子が、「働くため」と考えていた。自分の親や、学級に在籍する外国籍の子の親からの情報もあり、日本の方が諸外国よりも給料が高いことや工場でたくさんの人が雇われていることを知っていたからだ。その後の、日本に住む目的について調べる学習を通して、働く目的だけではなく、日本に勉強をしに来ている人があることを知った。子どもたちは、予想した「就労」以外の目的で日本に住んでいる人があることを知り、「どんな人か」「何を勉強しているのか」「話してみたい」と豊橋に住んでいる留学生に関心をもち始めた。(資料1)一方で、「興味はあるけど、こわい」や「変な物を食べていそう」と、不安を感じる子や偏見をもっている子も少なかつた。普段 ALT など数少ない外国人としか接していない子たちにとっては、外国人への偏見を取り払い、外国文化への理解を深めるために、留学生と出会い触れ合うことが必要だと感じた。

・留学生はどんな人かな。D男のお父さんみたいに優しい人らしいけど、こわそうな顔の外国の人も時々見かけるから、会ってみたい気持ちはあるけど、不安だな。(A子)
・今までは、働く人しかしないと思っていただけ、勉強しに来る人もいるんだな。どんな勉強をしているのか、知りたいです。(B男)

【資料1：外国人がどうして日本に住んでいるのかについての調べ学習の振り返り】

(2) 留学生と出会う

留学生に会って話してみたいという子どもたちの思いを受けて、留学生が在籍している豊橋技術科学大学に連絡をして、学校に来て話をしてもらえないかと交渉した。子どもたちの中には、話を聞かせてほしいという手紙を大学に送る子もいた。

留学生との交流では、まず、お互いの国の紹介を行った。子どもたちは、豊橋で有名な物や、学校での一日などを紹介した。大学からの二人の留学生のグエンさん(ベトナム)、テイさん(中国)は、母国の気候や食べ物、小学校での生活の様子を紹介した。次に、日本に住んでみての印象や、勉強内容について話を聞いた。二人とも一生けん命日本語で話をしてくれたこともあり、最初はあまり近づこうとしなかった子たちも、少しずつ関わるできるようになってきた。休み時間には、留学生を誘って外で遊ぶ姿も見られた。子どもたちは、話を聞いたことで二人の母国や留学についてもっとくわしく知りたいという思いをもつようになった。また、給食を一緒に食べたり遊んだりしたことで、会う前は外国人と接することに不安に感じていた子の中にも、心の変化があったことが振り返りからわかる。(資料3)



【資料2：留学生との交流会①】

(3) ネットタッチコミュニケーション

・今日、グエンさんとテイさんに会ってみて、とてもやさしい人でほっとした。ベトナムでは、朝から外食をしてそばみたいな物を食べるのが普通で、びっくりした。でも、グエンさんも、日本では毎日湯船につかることにびっくりしたと言っていたから、普通が普通じゃないんだなってことがわかりました。(A子)
・わたしは、外国の人に知り合いがないので、いっしょに遊べてうれしかったです。中国では、どんな時間割なのか質問できたのでよかった。(I子)

【資料3：留学生との交流会後の振り返り】

半日の交流で、多くの子が留学生と打ち解けることができた。資料3からもわかるように、仲良くなれてうれしいという思いをもった子や、聞きたいことが聞けてよかったという子もいた。しかし、1回だけの関わりでは、その人の考えや思いに寄り添っていくことは難しい。留学生に強い思い入れをもつためには、もっと交流を重ねる必要があった。かといって、研究や勉強が本分の学生に何度も来てもらうことはできない。そこで、もっと日常的に関わりをもてるように、ネットタッチコミュニケーションを取り入れることにした。ネットタッチコミュニケーションとは、留学生と子どもたちが、メールを通して日ごろの生活の様子を伝えたり、質問をしたりして、交流を図るものである。メールのやりとりで、留学生の思いに触れる機会が増やせると考えた。質問カードを学級代表がまとめ、それを輪番制でパソコンに打ち込む。午前中に送れば、昼食時には返信が来た。どんな質問にもきちんと答えてくれるので、参加者がどんどん増えていった。(資料4) また、毎日の日記の中にも、留学生の名前が登場する子がいるほど、二人

のことを好きになっていくのが感じられた。

(4) 留学生の思いに迫る

交流会から、多くの子が「二人の国についてもっと知りたい」「留学ってどんなものなのかな」という疑問をもつようになった。国と国とのつながりを学習する前に、その国が日本と何が同じで何が違うのかを理解させたかった。そこでまず、グエンさん、ティさんの出身国である、ベトナムか中国のどちらかの文化について調べる学習を行った。図書と教師が作成した資料で調べ、さらに知りたい情報が見つからないときは、メールをして情報を集めた。その後、調べたことを模造紙にまとめて発表し合った。子どもたちは、「祭り」や「食べ物」など、日本とのたくさんの共通点を発見することができた。また、同じアジアの国でも、5年生で学習した農業の仕方や、着る物や生活の仕方が違うことにも気づき、他国への理解を深めることができた。友達の発表を聞いた後の感想では、二人の留学生の母国のことを知ることができたうれしさ、違う国でも、共通点がたくさんあることに気づいたうれしさを書いてある子がたくさんいた。また、その国にはその国の「当たり前」があることにも気がつくことができた。(資料5)

- ・わたしは、グエンさんの国ベトナムについて調べました。みんなの発表を聞いて、ベトナムの小学生は高師とはちがう勉強をしていることがわかってうれしかったです。(A子)
- ・同じアジアだからかもしれないけど、ティさんの中国は、日本と同じようなことが多くて、意外でした。違うこともあったけど、似ているところが多かったんで、ティさんは知らないかもしれないので、またメールで知らせたいです。(S男)
- ・変なことだと思っていたけど、グエンさんが普通と言っていたので、別に変なことじゃないことがわかりました。(U子)

【資料5：二人の国の調べ学習発表後の振り返り】

また、食べ物について多くの子が強い興味をもったので、他国の食文化をより身近に感じることができるよう、ベトナム人が朝食で食べるという「フォー」づくりを体験活動として取り入れた。グエンさんにメールで作り方を聞いて、できるだけ同じ材料や器具を使って、日本の麺類との違いを確かめた。(資料6) 体験後の感想では、味は違うが、同じような物を食べていることに親近感を覚えたような意見が多く見られた。

「留学」については、種類、費用、期間、行く国を調べた。子どもたちの予想では、留学が簡単にできるものと考えていたので、たくさんの準備期間が必要なのに驚いている様子だった。調べを通して、だんだん制度が変わってきていることや、たくさんの費用が必要などの、基本的な情報を知ることができた。

他国の文化と留学についての調べを通して、子どもたちは、共通点をたくさん見つけ、より親近感をもつようになった。同時に日本との違いもたくさん知ったことで、日本に住む大変さにも気づいた。ここで、留学生たちが、家族の安泰や、国の発展についても考えていることに気づかせるために、どんな気持ちで、日本で生活しているのかと疑問をもった子を取り上げた。「日本で暮らすのは大変なのに、グエンさんとティさんは、どんな思いで日本で勉強しているのだろう。」という課題で話し合いを行うことにした。

話し合いの始めでは、A子のように、「食事や生活スタイルも違うし、お金も月に10万円以上かかるからかなり大変で、本当は帰りたいと思っている。」という考えの子もいた。調べ学習で、留学費用がかなりかかることや、昔の留学生は裕福な家庭が多かったが、現在はかなり苦労して留学する人が多いことを知ったからだ。しかし、話し合いが進むに連れて、貧しいからこそ家族や国のために留学してくる人も少なくないことを意見にする

子が出てきた。子どもたちは、意見を通わせているうちに、留学生の強い思いに少しずつ迫っていった。話し合いの終末には、留学生の夢にかける思いをさらに深めるために、ゲストティーチャーの留学生2人に話をしてもらった。二人には「環境が違って、夢のためならがんばっている。」「大学の人や近所の人、日本での常識を教えてください、自分たちの文化を受け入れてくれるので助かっている。」という内容で子どもたちに話をしてくれた。授業の振り返りでは、外国人に対する接し方について考えている子や、留学生の強い思いに感心する子がみられた。A子のように多くの子は、話し合いを通して、留学生が苦労しても叶えたい夢のためにがんばっているという強い思い

Q：休日は、どんなことをして過ごしていますか。ぼくは野球を一日やっています。(C男)
A：豊川市のお祭りに「ちんどん屋」として参加しているので、そのための練習が毎日あります。後は、高師校区のハンバーガー屋さんで働いているので、食べにきてね。
Q：日本に来て、お風呂以外に「ちがうなあ」と感じたことはないですか。(A子)
A：たくさんありますよ。ぼくの村では、掛け布団はないし、トイレも違います。きっと気候が違うから、こういう違いがあると思います。着る物は同じだけど、寝る前に着替えることはしないな。
【資料4：ネットタッチコミュニケーション】



【資料6：フォーづくり】

- C1：本当は外国で暮らすのは大変だから、実は帰りたいと思っています。
C2：付け足して、月に平均で13万円もかかっているから、アルバイトをしなくちゃいけないからとても大変。
～中略～
C3：グエンさんとティさんは、前に会ったときに、やりたいことがあって日本に勉強しに来たと言っていたし、メールでも国を豊かにしたい夢があるとっていて、そのために勉強しに来ているから、がんばろうという気持ちで生活していると思います。
A子：みんなのいうように、大変だけど、応援したい。絶対夢を叶えたいという思いでがんばっていると思うから。
～中略～
グ：ベトナムとは環境も違う土地だけど、日本の技術を学んでロボット技術になり、ベトナムを発展させたい夢を叶えたいから、がんばっているんだ。大変だけど、日本人の友達とか近くの家の人々が親切にしているから、がんばれるんだ。
テ：私も、日本の文化を教えてくださいたいので、とても助かります。私たちのことも、受け入れてくれるので、うれしいです。お金のことは、日本からも助けてもらえるので、日本を選んでよかったと思います。

【資料7：どんな思いで勉強しているのか（授業記録）】

に迫ることができた。(資料8)

・今日、話し合いで感じたことは、外国で暮らすのは大変だということです。留学生は、国のために一生懸命生活しているから、すごい人たちです。わたしは、日本のことはまだまだ考えていないので、考えないといけないと思います。大変なことが多岐にわたるけど、その国の人たちがちゃんと教えてあげたり、留学生の生活のことをわかってあげたりすれば、大変さが少し減るんじゃないかなと思いました。私たちも、少しくらい違うことがあっても、気にしない気持ちが大事です。(A子)

【資料8：どんな思いで勉強しているのか(振り返り)】

(4) 日本の政策について考える

留学生の話の中で、日本からも外国人留学生に対して援助が出ていることを知った子どもたちは、「留学生の母国は、留学生がいろいろな知識や技術を学んで来ることは、いいことがあるのはわかった。でも、日本は外国人留学生がたくさん日本に来ると、いいことがあるのか。」という疑問をもつようになった。今までの、「人」の思いに触れる学習から、「国」の考えに触れる学習にすすめていくために、大切な疑問だと考えた。そこで、その疑問を共通課題とし、調べ学習を行った。

調べの中で、日本には技術力があり、それを諸外国から来た留学生に教えることで、留学生が母国に帰ったとき、その国にある日本の工場や研究所でそのまま働けることを知った。学力が高く、仕事意欲も高い両方の文化を知っている留学生が、日本の企業で働くことが、日本の利益につながることに気づいた。また、日本の政府が、「留学生30万人計画」を打ち出し、2020年までに達成できるように政策を進めていることを知った。しかし、一方で、デメリットの可能性もあることに気づいた。留学生がそのまま日本に残るケースも増えていることと、日本の大学生の就職率が下がっていることと関連づけて心配になる子がでてきた。子どもたちの中で、この計画が達成されたほうがよいのか悪いのかで意見が分かれた。国の出している政策が、どちらの国にとってもメリットがあるように考えられていることを理解させるために、「留学生30万人計画は、達成すべきなのか、そうでないのか」について、事実をもとに話し合うことにした。

「達成すべき」という意見は、C1のように、日本に留学したいと考えている外国人のデータを集めてきたり、大学が救われていると事実を資料として見せながら意見を述べたり

した。また、「グエンさんのように、母国のためにがんばっている人がいるから。」というC4のような意見も出た。

反対派は、留学生の受け入れにはお金がかかりすぎるという考えと、日本人の働き口を心配する考えがでた。しかし、話し合いが進むと、賛成派の中から、留学生を受け入れることで、その国に日本の企業が入りやすくなることや、日本の失業率と留学生の増加は、つながりがわからないなどの考えが出された。反対派の中の、A子のように留学生との関わり合いを経て留学生に好意的な気持ちをもつようになった子は、留学生の気持ちを尊重したいと話すようになった。

その後、賛成派の考えを聞いて、子どもたちのほとんどが「どちらの国のためにもなるなら、達成してほしい。達成するべきだ。」という考えに流れていった。留学生との触れ合いやメールによって親近感が得られたことで、日本の政策に対しても他人事にならず、留学生の立場に立って考えることができたと考えられる。この話し合いの振り返りでは、留学生をたくさん受け入れることは、留学生を出す国や本人たちのためにもなるし、日本のためにもなるはずだから、大切なことというまとめが多くあった。また、疑問として、留学生のこと以外にもお互いのためになることを日本はしているのかということが出たので、これからの課題とした。(資料10)

・テイさんは、日本に来て日本を好きになったと言っていた。私もうれしい気持ちになったから、そういう留学生がどんどん増えてくれればうれしい。日本に就職すると、日本の会社のためにもなるという意見に賛成です。どちらのためにもなることだから、達成するべきだと思います。(A子)

・留学生を増やすことは、留学生の母国のためにも、日本のためにもなることがわかりました。留学生受け入れは日本のためになることはわかったけど、他にも世界のためにも日本のためにもなることって日本はやっているのかな。(H男)

【資料10：留学生30万人計画は達成すべきか達成すべきでないか(振り返り)】

(5) これからの日本と外国との関わり方を考える

これからの日本と外国との関わり方を考える上で、まず現在までに、日本がどのような活動を行ってきたかを知る必要があった。そこで、図書と自作資料を活用して、これまでの活動の様子を調べる学習を行った。戦後、日本が行ってきた大きな活動として、まず、国連事業への参加があげられる。国際連合の一員として、各国に働きかける意義を知ること、子どもたちが世界の経済事情を知ることにつながった。また、姉妹都市や交換留学など、国際交流を盛んに行っている国や都市が多くあることも調べた。さらに、各国との貿易のようすを地図にまとめる学習を通して、

C1：日本は、技術力も高く、世界でも7番目に人気があるから、どんどん留学生を呼び寄せたいと思います。

C2：10万人でも、税金を4億円もかけています。30万人になったら、40億円もかかる計算だから、お金がかかり過ぎると思います。

C3：留学生がたくさん来たことで、前は5年間で30個も大学がつぶれていたのに、留学生が増えたことで、助かった大学が調べただけでも10校以上あるから、日本のためにもなると思います。

C4：グエンさんみたいに、夢がある人が日本に来るはずだから、がんばってほしいから、達成すべきだと思う。

C5：留学生はテイさんみたいに、卒業後に日本で働きたいと考えている人が多くなりすぎると、日本人の働き口がなくなってしまうかもしれないから、達成しないほうがいいと思います。

～中略～

C6：グエンさんやテイさんのように、夢をもった人がたくさんいるから、受け入れるべき。お金はかかるけど、卒業後に日本の会社に就職する人が5割というデータがあるから、お金を出す価値もあると思います。

～中略～

C7：留学生が来れば、向こうの文化も知ることができるから、日本も成長できると思います。

C8：お茶とか、食べ物とかも、外国の文化が多いから、やっぱりたくさんの外国人が日本に来るのはいいことだと思います。

【資料9：留学生30万人計画は達成すべきか達成すべきでないか(授業記録)】

5年生の学習を思い出した。調べ学習の発表から、子どもたちは、日本と貿易が盛んに行われている国ほど姉妹都市や、留学生の数も多いことに気がついた。互いの国の人々が、国をまたいで交流することは、お互いに国に利益を生むことにもつながっていることを理解することができた。

調べ学習から、問題点も見つかった。日本との関係がよくなったり悪くなったりしていることや、日本人に対してよい感情を持っていない人がある国もあることを知り、「どうしたらもっと日本は他の国と上手につきあっていけるのか。」という思いをもつようになった。

単元のまとめとして、「これから、日本は世界中の国と、どうつきあっていけばよいかな」という課題で話し合いを行った。話し合いでは、「日本の政府が、お互いの国になることを考えて、上手につきあっていく必要がある。」という考えと、「自分たち一人一人が、日本に住んでいる外国人に対する接し方を考える必要がある。」という考えにまとまった。話し合いを通して、まず、自分たちが一人一人の外国人と仲良くなり信頼し合うことが大切であるとともに、国と国が自分の国のことだけでなく、相手の国のことについてもしっかり考えていくことが大切だということに気づくことができた。(資料1 1)

・日本の政治家は、日本の利益だけを考えるのではなくて、つきあう国すべての国が笑顔になるようにつきあっていってほしい。わたしたちも、最初は、外国人はこれいと思っていただけ、そうじゃなかったことがわかった。こわがらずに、日本のことを好きになってもらったり、相手の国のことを好きになったりしたいと思いました。(A子)

・日本と仲がよい国と昔何があったのか、ぼくはもっと勉強しないといけない気がする。(J男)

【資料1 1：これから、日本は世界の国とどうつきあっていけばよいか (振り返り)】

5 研究の成果と今後の課題

(1) 手立ての検証

①人との関わりを大切にしながら外国文化を学ぶ

本実践では、外国人の立場に立って物事を考えられるようにするために、地域の留学生を教材化し、夢をもって日本で技術や知識を学んでいるという留学生の強い思いに迫っていった。子どもたちは、交流会やメールで留学生と深く関われば関わるほど、留学生に強い思い入れをもつようになった。日本で大変な生活をしている留学生が、少しでも負担を軽くするために、自分たちにもできることがあることに気づいていった。また、留学生が日本人に対してどのような印象をもつかということが、日本にとっても重要な意味をもつことにも気づくことができた。外国人との関わり大切に学習展開は、他国の文化のよさを理解するとともに外国人の思いに寄り添い、その人の立場に立って物事を考えるために有効な手立てだったと言える。

・ティさんとメールをしていると楽しい。外国は変じゃないこともわかった。中国のことを何でも教えてくれるし、日本のことも教えられるから、会えなくても仲良くなれた気がします。名前を覚えてくれてうれしいです。もっと会いたいです。(A子)

【資料1 2：ネットタッチコミュニケーションをした感想】

・グエンさんとティさんには、夢を叶えてほしいなあ本気で思います。二人はもちろんだけど、だけじゃなくて、日本に来ている留学生には、夢を叶えてほしいです。わたしは、日本で生活している外国人の人と、もっと仲良くなりたいと思いました。外国人とたくさん話して、日本のことを知って、外国に帰ったときに日本の様子を話してもらえればいい。日本のことに興味をもってもらえれば、もっと留学生も増えると思うから。(A子) 【資料1 3：単元終了時の感想】

②国同士がつながるよさに目を向け、世界と日本、外国人と自分たちのかかわり方を考えるための工夫

日本と諸外国の関わり方について考えるとき、規模が大きすぎて自分のこととしてとらえることができないと考え、地域の留学生と関わりを深めてから、日本の政策について考えるという単元構想をつくった。ネットタッチコミュニケーションや体験活動、話し合いを通して、留学生の思いに触れた子どもたちは、関わった二人の留学生のことを好きになり、相手の立場になって物事を考えられるようになった。その学習があったからこそ、その後の日本の政策に日本だけのメリットを考えるのではなく、相手の国のメリットにも目を向けて、これからの日本と世界との関わり方を自分たちのこととして真剣に考えることができたことにつながったと言える。

・留学生30万人計画だけでなく、グエンさん、ティさんのためにも、日本のことばっかじゃなくて、他の国のためになることを考えてつきあうべきだと思いました。こういう計画は、どちらの国のためにもなるので、とてもよいと思います。(A子)

【資料1 4：単元終了時の感想】

③子どもの主体的な学びを支える

留学生に関わる資料は、ほとんどが大人向け、留学希望者向けの資料になっている。また、留学そのものも、子どもたちには関わりやすい話である。自作資料を作成して調べ学習をしたり、子どもの思いを朱書きや対話で支えたりしたことで、どの子も課題解決のための確かな足場を作り、積極的に話し合いに参加することができた。

(2) 今後の課題

今回、国同士のつながりを考えさせるために、「留学生」という立場の外国人滞在者を扱った。子どもたちはその人々と触れ合いながら外国文化を学び、国同士のつながりを考えるようになった。しかし、日本に住んでいる外国人は、様々な理由で様々な場所に住んでいる。国と国のつながりを考えるときに、「就労者」など、別の視点からアプローチをすることで、違った良さや問題点が浮かび上がってくるだろう。今後は、それらを視野に入れながら、単元構想を構築することも考えていかなければならない。